

寄稿

医療・福祉現場で働く

聞こえない人たちの

声

-12-

〈最終回〉

看護師の木下三明と申します。

生まれつきの聴覚障害で、周囲に理解者がいないまま苦しい境遇の中に育ちました。その中で「看護師になりたい」との夢を抱き、7年前に看護師になりました。

現在、地域密着型の病院の整形外科病棟で、主に手術を受けたりリハビリをする患者の担当をしています。コロナ禍においては、当然マスクの着用が必須。聞こえないことをカバーするために、目視で観察や確認を行い、音声にこだわらず身振り手振りや筆談など他の手段も活用するようにしています。

す。それでも、電話や聴診器などで苦労することもあります。

看護部長から「障害があっても『何ができない』と切り落とすのではなく自分ができるところをのば

聴覚障害者が活躍する

医療環境へ改善を！

すように」との助言を得て、今は医療職を志す学生や新人の指導もしています。また、年に数回ですが、ろう者が入院してこられることがあり、学生時代に習得した拙い手話で看護をさせていただいて

います。

聴覚障害を持つ医療従事者の会による『医療・福祉現場で働く聞こえない人の声』の連載は今回で最後になります。12人の声を紹介させていただきましたが、同会には約80人の会員がいて、医療関係の仕事をするきこえない人、きこえにくい人は年々増えています。

でも、現場では聴覚障害者が一人だけで苦労しているケースがほとんどです。まずは、皆さまに聴覚障害を持つ医療従事者が全国にいることを知っていただき、さらに理解を深めていただきたいと思っています。そして、聴覚障害者が働きやすい医療環境に変わっていくよう、これからも同会一同で頑張っていきます。